

## 他者が生み出す表現のひろがり

中国学園大学 子ども学部 子ども学科  
准教授 柏原 寛



### 1. 「エモい」感じとの出会い

本学では課題研究という3年生の授業から研究室を選択します。私は制作研究を担当しています。まず、学生が気になるもの、好きなものを選びます。その「よさ」とは何なのか、どこに「よさ」があり、感じるのかを掘り下げていく対話の形式で制作を進めています。様々な言葉が出てくるのですが、近年出会ったのが「エモい」です。

インスタグラムなどのSNSを介した、主に写真を対象にした言葉となっているようです。2016年三省堂「今年の新語2016<sup>1)</sup>」で取り上げられているので、最近普及した言葉です。

色彩に興味を持った学生の撮影した写真(図1)が「エモい」ということなのです。他の学生たちから「エモい～」と評価を得ていました。私が「エモい」という言葉に直面したのはこのときが初めてです。私だけピンときていない居心地の悪さがあったので「花火を持っている手を入れるともっとエモいのかな?」と、場面の切り取りをエモいと結びつけて探ったのですが、それはエモいから外れるということでした。その後インターネットで検索し、情報を集めて「エモい」感覚をおおづかみには理解したのですが、翌週はさらに難解なエモい写真(図2)が出てきました。

複雑なコンテキストの上に成り立つ「エモい」という感覚が言語化され、学生たちの間である程度共通認識を得ているということが興味深い社会現象だと思いました。



図1 学生作品



図2 学生作品

本人がもつ「エモい」の定義を明らかにするには、さらに対話を深めなくてははいけません。エモい感覚の「よさ」を探ること自体はとても楽しいものです。この楽しさは、「エモい」がもつ複雑なコンテキストによるわかりにくさゆえの面白さでもあるのですが、「あー、それぞれ」というような対話は「よさ」が明らかになる楽しみがありますし、「それはちょっと違う」という対話は、逆照射という形で「よさ」が浮かび上がったり、本人の意図しない発見が生まれたりする楽しみがあります。

私自身としては、このような表現物を媒介に、「(作者本人の考えとは) ちょっと違う」が生まれる対話に授業として表現活動を行うひとつの価値が隠れているのではないかと感じています。

## 2. 授業 図画工作の中での対話

小学校教員養成課程での授業、図画工作を行うにあたり、重視しているものの一つに「思いつく活動の価値を思い出してもらいたい」ということがあります。学生たちの中には授業に対して、あらかじめイメージしたものを形にするという図3のような固定概念があるように感じます。しかし、図画工作の題材の中には、図4のようなプロセスも用意されていると伝えることで、苦手意識を横に置き、安心して取り組むことができるのではないかと考えています。

たとえば、紙を無作為にやぶいて見立てる題材では

図4のようなプロセスが発生しています。まずやぶるので、学生も面食らうわけですが、つくるものが偶然の形なので、学生も気負わずに見立てを楽しんでいるようです。

また、授業では活動の途中に、クイズ形式として自分の見立てを隠し、他者の見立てに耳をすませる活動を行っています。その活動からは、「自分の思っていたものよりも、そう見えるものが聞けて面白かった」などを聞くことができます。自分が生み出したものに、他者の解釈が異なる価値を生み出したという経験となるのですが、本人は「くやしい」とも思っておらず、「それもいいね」「なるほど」「そっちのほうがいいかも」といったような捉え方をしていることが多いようです。偶然の形に自分も他者も等価に存在しているようです。

私自身としては、自分のもったイメージと他者が抱いたイメージとに違いが発生することを楽しんでいる姿がみられたら、学生の中で変化が起き始めている傾向として捉えています。

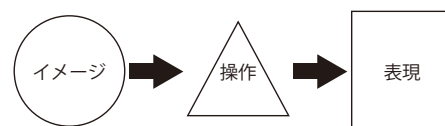


図3 イメージから操作

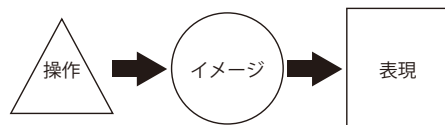


図4 操作からイメージ

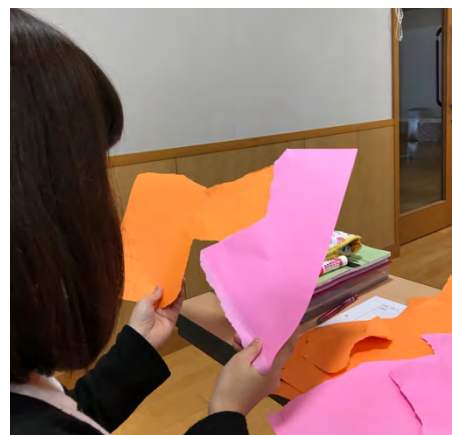


図5 操作からイメージ

作品から一つ以上の見方・考え方が生まれている状態と捉えています。

モダンテクニックや筆以外の素材を使って模様を描き、その模様をもとにコラージュする題材でも図4のようなプロセスが発生します。偶然生じた模様に対して、解釈を重ね、コラージュしながら後追いで意図を込めていく活動です。図5に示したコラージュは、「雨」がモチーフになって表現されているものです。本人は「図画工作が苦手な、模様からは思いつかないので、雨にしました。」と述べていました。



図5 自分の雨と他者の雨

苦手意識をもっている学生は、花、動物、しずく、ハート、顔など、シンボリックで相手に伝わりやすい形を選ぶ傾向が見受けられます。しかし、相互鑑賞での対話のときに得た「晴れがしずくになっているということ？」というコメントから、「自分の描いたイメージとは異なるイメージを知ることができた」と喜んでいました。

ここでも、自分のイメージと他者のイメージのギャップが、本人の見方・考え方を広げているということが確認できるのではないかと思います。

### 3. 他者が発見する表現

同じものであるにも関わらず、異なる見方、考え方が生じる可能性があることは図画工作・美術の面白さの一つだと思います。その面白さに出会うには他者の存在が必要です。他者の解釈と関わることによって表現と見方・考え方が1つ以上にふくらみます。それが作者の意図とは異なる「間違い」だったとしても、創造的に発展することがあります。こういった関わりは、自身の表現を広げることとともに「他者の表現・解釈と広く関われる力」も育成しているのではないかと考えています。

未来の先生には、多様な表現の可能性に触れてほしい。それぞれの見方、考え方にはそれなりの合理性があるという理解とその選択の経験は、子どもたちとの関わりに少なからず価値を生み出すように感じています。

#### 参照

1) 三省堂「今年の新語 2016」<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/topic/shingo2016/2016Best10.html>